

孫について

小林まもる

孫よ

いつもの夏のように

午前から油蟬が焦げ付いているよ

無花果は青い実を閉じたまま

いちじく

秋桜のたおれた茎は地を這って

コスモス

動かぬ季節に耐えているよ

いつもの夏のように

おまえにはいつもの焦げ付いた匂い

白昼の野末に描かれたハイウェイ

動かない空 遠ざかる意識

おまえの夏には

楽曲の指揮者はまだいらぬ

孫よ まもなくわたしは六十五歳

夏は終わるから意味があると

どこかで飲んだ薬剤が効いている

そのへんから

孫よ

わたしの季節は

流れ去る仕草を身に着けた

戦後の風 希望のように

ときどきは吸い込み

おまえの誕生を詩に書いたりして

流れを未来の方向に何とか

留めようとしているのだが

ほんとうは「サヨナラ日記」

を毎日書いていることなのだよ

